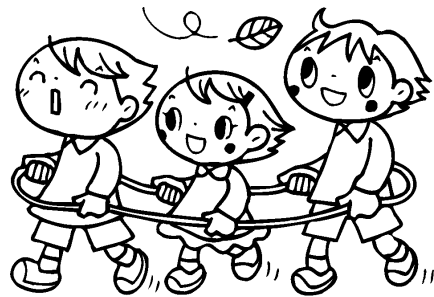


意欲的に体を動かして遊ぶ幼児の育成

～戸外での運動的な遊びを通して～



那覇市立与儀幼稚園教諭

洲鎌 裕子

目次

I	テーマ設定の理由	49
II	研究目標	50
III	研究仮説	50
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	50
V	研究内容	51
1	幼児の健康な心と体について	
2	心身の育ちと運動的な遊び	
(1)	動きの獲得と運動的な遊び	
(2)	心の育ちと運動的な遊び	
(3)	運動的な遊びにおける「戸外遊び」の重要性	
3	意欲的に体を動かして遊ぶための教師の援助と環境構成の工夫	
(1)	自ら体を動かそうとする意欲とは	
(2)	教師の援助と環境構成の工夫	
①	教師の援助	
②	環境構成の工夫	
VI	保育実践	54
1	保育計画	
2	保育の実践	
VII	結果と考察	56
1	作業仮説1の検証	
(1)	イメージを持って遊ぶことができたか	
①	結果	
②	考察	
(2)	幼児同士のつながりを感じながら遊ぶことができたか	
①	結果	
②	考察	
2	作業仮説2の検証	
(1)	結果	
(2)	考察	
3	保育実践前後の結果と考察	
(1)	結果	
(2)	考察	
VIII	研究の成果と課題	60
1	成果	
2	課題	

意欲的に体を動かして遊ぶ幼児の育成

～戸外での運動的な遊びを通して～

那覇市立与儀幼稚園教諭 洲鎌 裕子

I テーマ設定の理由

現代社会は、生活が豊かになっている反面、交通事故や犯罪への懸念などから体を動かして遊ぶ機会や場所、仲間などが減少している。そのことは、幼児期からの多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響しているだけでなく、病気になりにくい等健康にも関係し、意欲や気力の減弱、コミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすと懸念されている。

その社会背景を受け、幼稚園教育要領では、領域「健康」に関して体を動かすことの充実という視点が示されている。「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」という内容に関連して、内容の取り扱いにおいて「十分に体を動かす心地よさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」が明記されている。このことは、ただ体を動かせばいいということではなく、自ら体を動かそうとする意欲を育てることによって、いろいろな遊びが展開されて十分に体を動かすことにつなげることを意味している。

本学級の生活実態調査によると、2割強の幼児が徒歩以外で登園し、家庭では、テレビ視聴、お絵かき、ままごと、工作と、長い時間を室内で過ごしていることがわかった。本学級の幼児は、主体的に好きな遊びを見つけて固定遊具で遊んだり、木登りや植物の種取りをしたり、砂遊びや鬼ごっこなど積極的に体を動かして遊んでいる子が多い。しかし、その一方で、体を動かすことに対して「疲れるから」「どうせできないから」と興味を示さない子や、転んでも手がつけれないといった身体的な能力が身についていない子も見られる。幼稚園において、戸外で体を動かして遊ぶ機会を十分に保障する重要性を痛感する。

私自身の保育を振り返ってみると、幼児が楽しみながら体を動かして遊べるための環境構成や、幼児の活動を支え一緒に楽しむ援助を繰り返し行ってきた。次から次へと意欲的に生き生きと遊びに取り組む幼児がいる反面、一人一人の遊びの経験や発達の差が大きいために、体を動かす遊びが消極的な子には達成感や満足感を十分味わわせることが足りなかったと反省する。

そこで、本研究では、戸外での運動的な遊びの楽しさを感じさせ、一人一人の興味や生活経験に応じた遊びの中で意欲的に体を動かして遊べるような幼児の育成を目指す。そのために、幼児期の運動の在り方を捉えなおし、友達と楽しみながら遊べるための援助の工夫や、幼児が「やってみたい」と心が揺さぶられ、「できてうれしい」「やって楽しい」という気持ちが育まれるような環境構成の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

幼児が意欲的に体を動かして遊ぶための教師の援助や環境構成の工夫について実践的に研究する。

Ⅲ 研究仮説

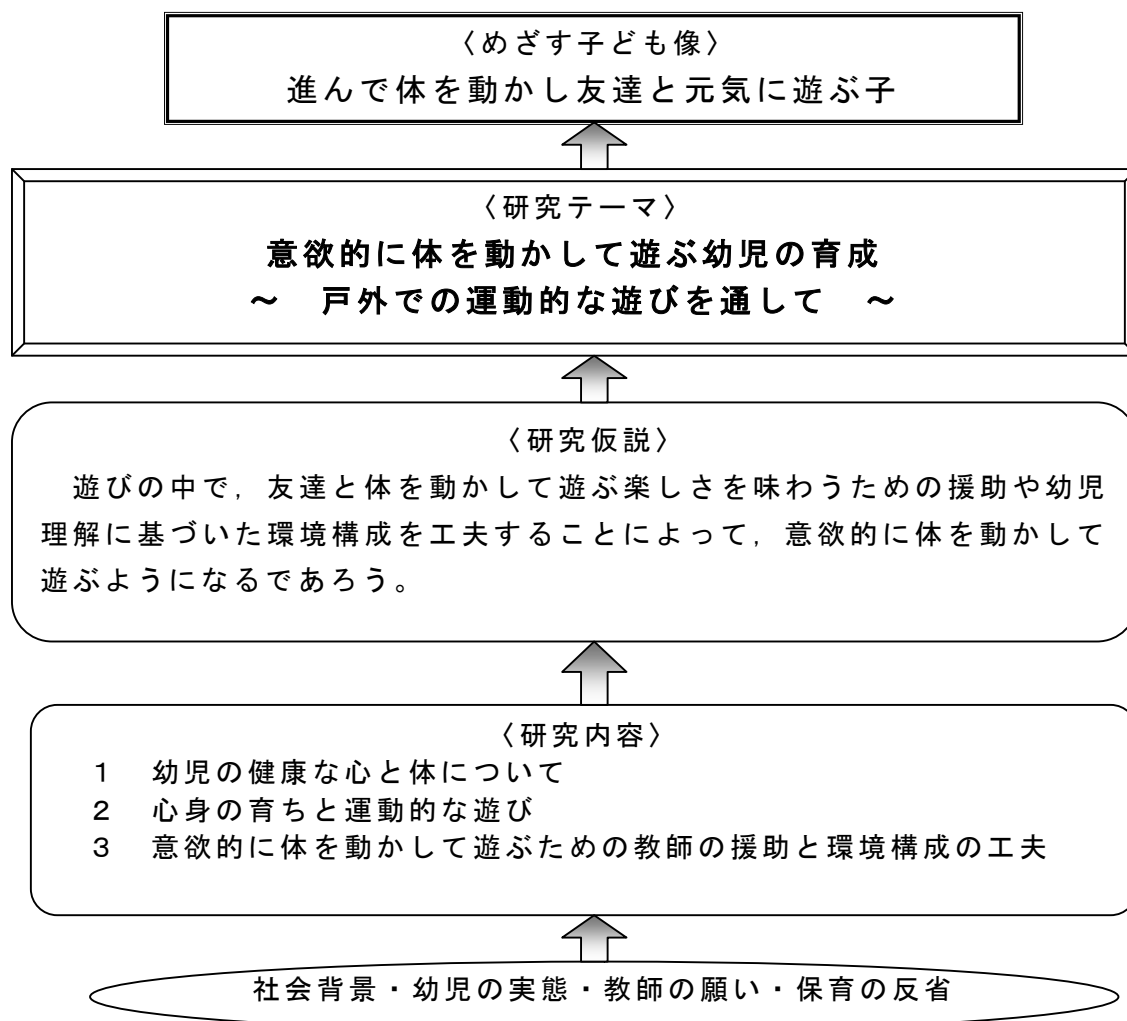
1 基本仮説

遊びの中で、友達と体を動かして遊ぶ楽しさを味わうための援助や幼児理解に基づいた環境構成を工夫することによって、意欲的に体を動かして遊ぶようになるであろう。

2 作業仮説

- (1) 遊びの中で、イメージを持たせたり、幼児同士のつながりを感じさせたりする援助の工夫をすることで、幼児は友達と楽しみながら体を動かして遊ぶことができるであろう。
- (2) 戸外での運動的な遊びにおいて、幼児が自ら選んだ遊びに主体的に取り組めるような環境構成を工夫することで、達成感を味わい、意欲的に遊ぶことができるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容

1 幼児の健康な心と体について

WHO(世界保健機関)では、人間の健康な状態を身体・精神・社会の3側面が良好な状態としている。また、幼稚園教育要領解説(以下解説)の「健康」の領域には「健康な幼児を育てることとは、単に身体を健康な状態に保つことを目指すことではなく、他者との信頼関係の下で情緒が安定し、その幼児なりに伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるようにすることである」と述べられている。これらのことは、心と体の健康は相互に密接な関係があり、さらに幼児期においては、様々な環境に主体的に取り組んで活動することを通して、心と体の調和のとれた発達を培うことが重要であることを示していると考えられる。

2 心身の育ちと運動的な遊び

幼稚園教育要領では、体を動かすことの充実がうたわれている。体を動かして遊ぶということには、自然に触れながらの遊びや、砂遊び、大型積み木を使った遊びなど様々な活動があるが、本研究では、走ったり跳んだり投げたりといった体を活発に動かす遊びを、「運動的な遊び」と表現する。

(1) 動きの獲得と運動的な遊び

幼児期運動指針によると「幼児期は、運動機能が急速に発達し、多様な動きを身につけやすい時期である。この時期に、多様な運動刺激を与えて、体内に様々な神経回路を複雑に張り巡らせていくことが大切である。それらが発達すると、(中略)普段の生活に必要な動きをはじめ、とっさの時に身を守る動きや将来的にスポーツに結びつく動きなど基本的な動きを多様に身に付けやすくなる」と述べられている。表1は幼児期運動指針に示された、幼児期に経験する基本的な動きの例である。

表1 幼児期に経験する基本的な動きの例

体のバランスをとる動き	立つ・座る・寝転ぶ・起きる・回る・転がる・渡る・ぶら下がる
体を移動する動き	歩く・走る・はねる・跳ぶ・登る・下りる・這う・よける・すべる
用具を操作する動き	持つ・運ぶ・投げる・捕る・転がす・蹴る・積む・こぐ・掘る

これらの動きは、特定のスポーツ(運動)のみを続けるよりも、体を動かす遊びの方が多様な動きが含まれている。東京都教育委員会「運動能力の発達と『遊び』の大切さ」(2012)によると、図1に示すような運動的な遊びを通して、多様な動きが経験できるとしている。例えば、縄跳びでは「跳ぶ、回す、動きのタイミングをとる」動き、鬼ごっこでは「走る、かわす、判断して動く」動き、のぼり棒では「登る、握る、体を支える、ぶら下がる」動き、電車ごっこでは「歩く、動きを合わせる、走る」動きなどが経験できる。遊びを通して基本的な動きを獲得し、



図1 運動的な遊びと心身の育ち

徐々に滑らかに動けるようになり、やがて複雑な動きもできるようになる。また、幼児期運動指針には、5歳から6歳ごろの運動の発達の特性について「幼児にとって挑戦してみたいと思えるように組み合わせた動きが含まれる遊びに取り組んでいくことで、結果として『体のバランスをとる動き』『体を移動する動き』『用具などを操作する動き』がより滑らかに遂行できるようになることが期待される」と示されている。経験していない動きは、獲得することが難しい。幼児期には、発達の特性を踏まえ、より多くの動きを経験させることが、健康な体の発達にとって重要である。

(2) 心の育ちと運動的な遊び

次に、心の育ちについて考える。図1の運動的な遊びを例に挙げる。縄跳びでは「力を合わせる、友達を作る、真似をする」、鬼ごっこでは「ルールを守る、一緒に楽しむ、競う」、のぼり棒では「挑戦する、工夫する、集中する」、電車ごっこでは「力を合わせる、一緒に楽しむ」など、精神面でも多様な経験をするができる。運動的な遊びは、ルールのある遊びや友達がかかわる遊びが多い。このような遊びの経験を通して、豊かな人間性につながる対人関係、社会性の基礎を身につけていくと捉える。

また、2011年の文部科学省調査によると、「園で体を活発に動かす」と「やる気」の関係において、体を活発に動かす頻度が高い幼児ほど不活発な幼児に比べて「いつもやる気がある」比率が高いことがわかった。このような前向きな傾向は、「有能感」すなわち「自分はできる」という感覚や自信に支えられているといわれている。吉田伊津美(2012)は、「有能感を持つ幼児は、体を動かすことが好きになり、(中略)園生活でも積極的、意欲的に取り組むようになる」と述べている。幼児が有能感を感じる手がかりの一つを、吉田は「達成経験」だという。達成経験の積み重ねで、できることが増え自信が付いていくと今までやらなかったことや難しいことに挑戦しようとする気持が育つ。これらのことから、幼児にとっての適切な運動的な遊びの経験が、何事にも意欲的に取り組む態度を養い、健やかな心の育ちを促すことにつながると考えられる。

(3) 運動的な遊びにおける「戸外遊び」の重要性

幼稚園教育要領の領域「健康」の内容の一つに、「進んで戸外で遊ぶ」とあり、解説の中で「室内とは異なり、幼児が、開放感を味わいながら思い切り活動することができる」と示している。室内で体を動かす遊びもあるが、無籐隆(2008)は「動きの多様さや活動量という点からいえば、外遊びの方が充足の可能性が高い」と述べている。また、活動量はそう多くはないが、泥団子作りや虫捕りなど、繊細に体をコントロールしながら戸外で遊ぶ経験も大切である。さらに、暑さや寒さを感じながら遊ぶことによって、身体の調整機能も発達するといわれていることから、戸外で遊ぶことの重要性がうかがえる。降園後の戸外遊びが減少している実態を考えれば、園生活の中で幼児の戸外遊びへの意欲を高める必要がある。本研究においては、戸外において、幼児が意欲的に体を動かして遊ぶための教師の援助と環境構成の工夫について考えていく。

3 意欲的に体を動かして遊ぶための教師の援助と環境構成の工夫

(1) 自ら体を動かそうとする意欲とは

幼児期における運動について、杉原隆(2008)は「まず運動に対する自発的な意欲を育て、高い意欲に基づいて子どもが十分に体を動かして遊び、その結果として体力や運動能力が向上していくという道筋が重要」と述べている。さらに、「自ら体を動かそうとする意欲を育てるのに欠くことができないのが、十分に体を動かす気持ちよさを体験することである」としている。

また、無籐は「一人では自信がないが、教師や友達と一緒にならできるかもしれないという自信や、協同すればできるという関係において生まれてくる自信も重要である」と述べている。

これらのこと踏まえると、幼児は、教師との信頼関係に支えられ安定感を持って行動することを基盤に、主体的な活動において全力で体を動かして遊ぶことで気持ちよさや楽しさを感じ、力を十分に発揮して活動することで得られる達成感を味わい、もっとこうしたいという向上心が沸き起こることが、自ら体を動かそうとする意欲につながると考えられる。

(2) 教師の援助と環境構成の工夫

幼児期運動指針の教師への提案を参考に、体を動かして遊ぶ意欲を高めるための教師の援助と環境構成の工夫についてまとめた(表2)。

表2 教師の援助と環境構成の工夫

援助の視点	教師の援助や環境構成の工夫
・友達と一緒に遊ぶことができるように	・友達関係を捉え、幼児同士をつなぐ ・共通のイメージを持たせる
・十分に体を動かすことができるように	・固定遊具にも、幼児の遊びに応じて工夫を加えたり、様々な動きを引き出せるような遊具や用具の配置、幼児の動線を予想した場の構成をしたりする
・主体的に体を動かして遊ぶことができるように	・挑戦意欲がかき立てられるような環境構成 ・「やってみたい」「おもしろそう」と抵抗感なく取り組める遊びを取り入れる

①教師の援助

幼児同士をつなぐ援助

教師の援助の一つに「関係づける援助」があり、「人とのかかわりを広げる、遊びと遊びをつなげる、ほかの場や状況の変化に着目させる等、幼児の生活を豊かにしていくために、保育者が意図的に幼児どうしの関係や場の関係、遊びの関係等をつなぐかかわりをいう」(保育用語辞典 2010)と示されている。幼児を友達や環境と関係づけていくことで、友達と一緒にの楽しさを感じたり友達と力や心を合わせたりしてつながる嬉しさを味わう体験を重ねると、幼児の心に運動的な遊びが楽しいと刻まれていくと考えられる。さらに、友達との関係で遊びが豊かになるように、幼児が互いを見合い、友達のやり方をまねたり取り入れたりできるような場の設定など工夫していくことも必要であるとする。

イメージを持たせる援助

イメージとは、「過去の体験の中で記憶していることを思い出して再現することである」(保育用語辞典 2010)とある。また、柴崎正行(2001)によると、「イ

メージの広がり、遊びの広がりや深まり、継続につながり、イメージが無くなれば遊びはそこでストップする」と述べている。様々な体験の積み重ねが新たな活動の意欲につながることを考慮すると、幼児にイメージを持たせる援助が必要な場合がある。戸外の固定遊具の多くは、年間を通して常設されているので室内での環境に比べると空間が固定的になっている傾向がある。幼児の主体的な活動へとつなげるために、新たなイメージを持たせるとことで固定遊具へのかかわり方も変化し、遊びが新たな方向へと発展していくと考えられる。

友達とイメージを共有することができるよう、絵本や図鑑などを通して、幼児の思いや考えを教師がつないだりなどの援助を工夫することが大切である。運動的な遊びの場面においても、幼児が、共通のイメージを持ちながら友達と遊べるような援助を行うことは、体を動かす意欲を高めるのに有効な援助の一つであると考えられる。

②環境構成の工夫

解説には、主体的な活動が生じる環境を「幼児が興味や関心をもち、思わず、かかわりたくなるようなものや人、事柄があり、さらに興味や関心が深まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができる」と示している。また、無籐は「幼児が生き生きと取り組む遊びは、心が動かされない環境からは生じない」と述べている。このことは、幼児の心が揺さぶられ、やってみたいと思えるような意欲を喚起する環境を構成する必要があることを示している。

運動的な遊びにおいては、遊びのかかわり方に、個人差、経験差が見られる。同じことをやっても遊びへのかかわり方によっては、達成感を味わえる幼児もいれば、逆に無力感を形成してしまう幼児もいることに十分配慮する必要がある。幼児一人一人に達成感や満足感を味わわせるためには、自己選択、自己決定ができ、自分の好きなようにやってみることが可能な活動の場を工夫する必要があると考える。

本研究では、のぼり棒に段階的に目印をつけたり、うんていにマットで傾斜を作って休憩場所を設けたり、興味や関心を引き出すためにタイヤやロープなど新たな用具を加えて遊べたりするな環境構成を取り入れていく(図2)。



図2 環境構成の工夫

VI 保育実践

1 保育計画(全5時間)

生活発表会で披露した「ぼくらはちいさな海賊だ」というリズムダンスに多くの幼児が親しみを感じていたことをヒントに、絵本をきっかけとし「海賊」「宝島」「探

険」という言葉からイメージを持たせて遊びが広がるように工夫する。また、固定遊具や教材の可能性を利用し、幼児が友達と考えを出し合いながら遊び場を作っていけるようにする。友達の動きや技を見る機会を設け、さらに、その動きや技に幼児同士で話し合いながら名前をつけて共通理解を図り、楽しみながら挑戦できるように保育計画に取り入れる。

	活動	○ねらい	◎教師の援助 【 】援助の視点
実践1	友達の技を見て、動きや技に名前をつけよう	○園庭の固定遊具・教材を使って遊び、動きや技を発表し合う。  ○できるようになった動きや技に名前をつけて、クラス全員で共通理解する。	◎幼児同士が刺激を受け合い、遊びが他児へ広がるような場を設け、また、幼児なりの動き認め、自信につなげられるようにする。 【幼児同士のつながり・新たな動きの気づき】 ◎これまでの実態把握から、予想される技を絵に表しておき、技に名前をつけて共通理解が図れるようにする。【環境構成の工夫】 ◎クラスでの活動後に、自由に挑戦できるように場所と時間を確保する。【環境構成の工夫】
実践2	園庭を「みんなのたからじま」に変身させよう。	○イメージを持たせながら、友達と考えを出し合って宝島をつくる。 	◎リズム「ぼくらはちいさな海賊だ」を踊る。絵本「わんぱくだんのたからじま」を読み、幼児の発したつぶやきを拾い上げ、共通の話題し、体を動かしたくなるような遊びにつながるように、幼児の思いや発想をつなげる。 【イメージの広がり・共有】 ◎幼児の関心を高めるために、園庭の固定遊具の環境図を提示する。また、海賊船のペーパーサートを用意しておき、環境図の上で自由に動かして遊べるようにする。【イメージの広がり・環境構成の工夫】
実践3	宝島を作ろう。	○友達と考えを出し合い、工夫したり、試したりしながら遊び場を作り、体を動かして遊ぶ。 	◎前時で作った宝島の地図を基に、園庭に用具や表示を用意し、幼児と一緒に環境を構成する。【イメージの共有・環境構成の工夫】 ◎グループで探険を楽しむ。 【幼児同士のつながり】
実践4	宝島探険（本時）	○友達といろいろな運動的な遊びに取り組み、思いきり体を動かして遊ぶ。	◎前時の宝島探険を発展させて遊べるように、ストーリー性を加え、グループごとに探険する。【幼児同士のつながり・環境構成の工夫】
実践5	やりたい遊びに挑戦しよう。	○友達といろいろな運動的な遊びに取り組み、やってみたいこと、できるようになりたいことに挑戦して遊ぶ。 	◎動きや技に目標が持てるように、“やればできる”“ちょいむず”“鬼レベル”と話し合いグループ分けをする【挑戦意欲を高める】 ◎体をたくさん動かして遊んでいる姿や少し難しいことにも挑戦した姿を認め、誉めたり、喜びに共感したりすることで、より遊びを楽しめるようにする。【自信や意欲につなげる】

2 保育の実践

(1) 保育仮説

- ①宝島探険の作戦会議の場において、宝探し前の試しの時間に遊んだ内容について話し合い、お互いの良さやつながりを感じることができれば、宝探し探険への期待感を持ち楽しみながら遊ぶことができるだろう。
- ②宝島探険の活動の場において、幼児同士の励ましや応援を受けながら、いろいろな運動的な遊びを自分なりの目標を決めて遊ぶことができれば、達成できた喜びを味わうことができるだろう。

(2) 保育の展開(実践4)

時間	予想される幼児の活動	◎教師の援助 ※環境構成の工夫 【 】援助の視点
9:00	○園庭に集まり、グループに分かれて座り、話を聞く。	※バンダナを巻いて探検隊の気分を高める【イメージ】
9:05	○宝島で、自分の好きな遊びや挑戦してみたい遊びをする。	◎昨日までの活動を振り返り、活動の流れを確認する。 【イメージの共有】 ※「宝島に探検に行く前に、昨日と変わったところはないか、ちょっと試したり遊んだりしてきて良いよ。」と伝え、自分なりの目標で活動を選べるようにする【自己選択が可能な環境構成】
		◎幼児の表情や動きを把握し、楽しみながら取り組めるように一人一人に声をかけていく。特に、苦手意識の強い幼児には、意図的に声をかけ、励ましたり誉めたりする。【安心感を持たせる・挑戦している姿を認める・幼児同士のつながりを感じさせる】
9:15	<u>保育仮説①の検証</u> ○グループで集まり、作戦会議をする。	◎動線に配慮し、安全面に留意する。
		◎「昨日より難しくなっているところや、こうしたらいいよという良い考えをグループのお友だちと話し合ってみてね」と伝え探検隊に地図を渡し、グループで話し合う場を設ける。地図を見ながら挑戦する順番を決めたり、協力し合えたりするような話しができるように、幼児の声を拾いながら問いかける。【幼児同士のつながり・仲間意識・安心感】
9:20	○宝探し探検をする。 ・大きな輪を作って、ぼくらは小さな探検隊を踊る。	◎リズムを踊る【イメージの広がり・探検への興味の広がり】
	<u>保育仮説②の検証</u> ・グループ別に地図に書かれた順番で宝島探検をし、いろいろな運動的な遊びを、友達と一緒に楽しむ。	◎その子なりの目標に向かってがんばっている姿や、グループで応援し合ったり手を貸してあげたりする姿を認める。 【幼児同士のつながり・挑戦意欲・満足感】
		
9:40	○今日の遊びを振り返る。	◎力を合わせてゴールできたことを喜び合い、それぞれのグループで探してきた宝の箱に入っている言葉をつなげて話をする。【幼児同士のつながり】
		◎宝島で探検隊の友達と一緒に、体を動かして遊んだことで、どのような気持ちになったか、幼児の声を引き出せるように投げかける。
9:45		◎幼児一人一人に声をかける【どのようにがんばったのか、自分を振り返る】【個々の幼児の姿を認める】

Ⅶ 結果と考察

1 作業仮説1の検証

遊びの中で、イメージを持たせたり、幼児同士のつながりを感じさせたりする援助の工夫をすることで、幼児は友達と楽しみながら体を動かして遊ぶことができるであろう。

(1) イメージを持って遊ぶことができたか

①結果

幼児の宝島探検への興味や関心を引き出すために、絵本の読み聞かせをしたところ、表3のような「宝島探検をしてみたいね」「しかけとかあったらおもしろそうだね」などの声が聞こえた。また、リズムの歌詞や絵本の内容とつなぎ、幼児が持っているイメージを捉えながら話し合うことで園庭の環境図(図3)を作り上げ、その地図の上でペープサートの船を動かして遊ぶ姿が見られた。また、既設の固定遊具や、日頃好きな遊びの時間に使っていた用具の他、タイヤ、ロープ

などの用具を新たに加えたことで、跳ぶ、ぶら下がる、友達と一緒にリズムを合わせて歩くなどいろいろな運動的な動きが組み合わされていった。

表 3 幼児の姿・言葉

(実践 2) 活動の場面	幼児の姿・言葉(面白そうと興味関心を示す部分 線) (やってみたいと意欲を示す部分 線)
絵本の 読み聞かせ	「あ、宝島、知ってる」 発表会で踊ったダンスを軽く踊り出す 「宝島探検をしてみたいね」「僕たちは白ひげ海賊団になりたいね」
園庭の環境図 を見て	「よく見たら幼稚園のお庭だけど、宝島の地図みたい」「幼稚園のお庭をみんなの宝島にしようよ」「しかけとかあったらおもしろいね」 双眼鏡を取り出して、園庭を眺める
アイディアを出しながら、 “みんなの宝島”を作っていく場面	①「縄跳びは、たくさん回すとエンジンがかかるんだ。縄跳びエンジンでジャンプの力をつけよう」「パワーも集まるから、強い力がでるんだよ」 ⑧「ここにはヘビがいるね」「気付かれないように、そっと逃げよう」「かまれたらやばいよ」「逃げるだけならつまらないよ。起こさないように音を立てずに、ジャンプするほうがおもしろいんじゃない」 ⑩環境図ののぼり棒に付いているりんごを見て、「上まで登ったら、りんごが食べられるってことにしよう」「ぶどうやみかんもつけよう」

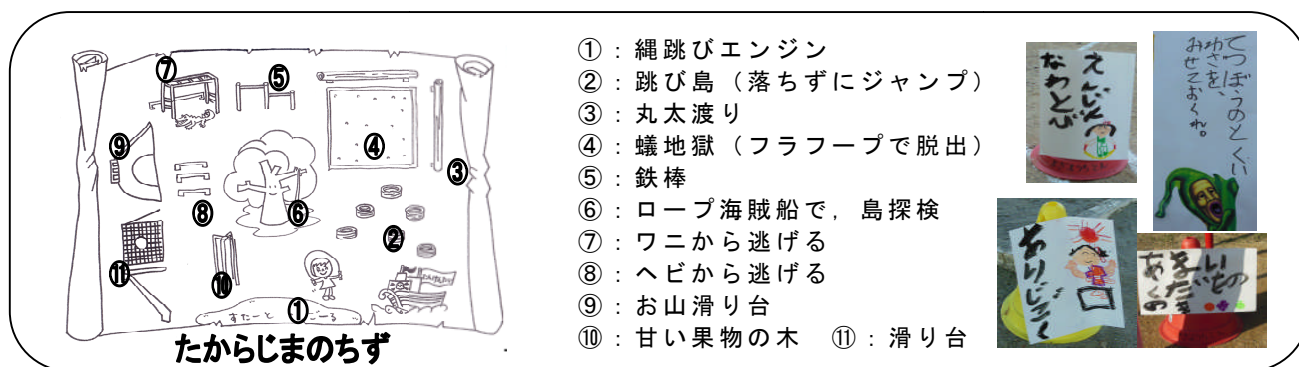


図 3 園庭の環境図

②考察

表 3 に示されている興味関心、意欲を示す言葉から、宝島探検がしたいという意欲が高まっていったことがわかる。また、新たな用具との出会いから、跳ぶ、ぶら下がるなどの動きが引き出されたことは、いろいろな遊びのイメージを持たせるのに効果的であった。幼児がアイディアを出し合いながら作り上げた環境は、興味をもった遊びにつながり、遊びに一層の広がりが見られ、体を動かしながら遊びを楽しんでいったことがわかる。教師が固定した発想にとらわれず、幼児の発想や思いをくみ取りながら環境を構成することは、幼児が体を動かし宝島探検を楽しみ、さらに遊びが充実していったと考えられる。

(2) 幼児同士のつながりを感じながら遊ぶことができたか

①結果

実践 1 の動きや技を見せ合った後の好きな遊びの時間には、表 4 の下線アのようにそれまで関心を示さなかった幼児も縄跳びやフープ、鉄棒などに自らかかわって遊ぶ姿が見られた。また、実践 3 の縄跳び海賊船での遊びでは、「1, 2, 1, 2,」と声をかけ合い(図 4)、ゴール時には喜び合う姿が見られた。また、作戦会議の場においては、下線イのように友達に寄り添い励ます姿が見られた。



図 4 縄跳び海賊船

表 4 幼児の姿・言葉

	活動	幼児の姿・言葉
実践 1	幼児同士、動きや技を見せ合う	・ 友達の見える動きや技をじっと見る。「すごい」「上手だね」と拍手を送る。 ・ <u>その後の好きな遊びの時間に、縄跳びやフープ、鉄棒などに自ら挑戦する。</u> ・ 「最初はできないと思っていたけれど、〇〇ちゃんが何度もがんばっているところを見ていたら、私にもできそうだと思ってやったら少しできたよ」と発表する。
3・4 実践	宝島で、運動的な遊びをする	・ 縄跳び海賊船で幼児同士、声をかけ合い、リズムを合わせて遊んでいる。 ・ 仲の良い友達と「なかよし跳び」に何度も挑戦している。 ・ <u>ィのぼり棒で「こんな風に足をかけたらいいよ」と助言を聞き、やってみる。</u>
4 実践	宝島探検作戦会議	<u>「ワニ(うんてい)の所、全部渡れないよ」という幼児に対して、う大丈夫、ぶら下がるだけでもいいよ」「途中で、休憩しても良いんだよ」と声をかけている。励まされた幼児は、うんていに自らぶら下がって遊ぶ姿んでいた。</u>

②考察

幼児が互いの動きや技を見せ合うことは、「やってみよう」「まねしてみよう」という姿につながり、体を動かして遊ぶきっかけになった。表4の下線イ・ウのような友達のアドバイスを聞きながらのぼり棒やうんていに挑戦する姿からは、友達と一緒に遊びたいという気持ちが高まれば、少し難しいと思うことにも挑戦してみようとする意欲が高まっていくのが感じられた。気の合う友達とグループを構成することは、幼児同士のつながりをより強く感じることはできたと思われる。また、必要に応じて教師が「お友達パワーで助け合ってるんだね」と互いの良さを認め、幼児の思いや考えを伝え合う援助を行ったことで、幼児同士のつながりはより強くなっていった。幼児同士の気づきを促す援助も効果的であると考えられる。

以上のように、イメージを持たせたり、幼児同士のつながりを感じさせたりする援助の工夫をすることで、友達と楽しみながら体を動かして遊ぶことができたと考ええる。

2 作業仮説2の検証

戸外での運動的な遊びにおいて、幼児が自ら選んだ遊びに主体的に取り組めるような環境構成を工夫することで、達成感を味わい、意欲的に遊ぶことができるであろう。

(1) 結果

実践1で、運動的な遊びにおいて、どのような動きや技があるのかを発表し合い、さらに、その動きや技に親しみながら遊べるように幼児同士で名前をつけた。また、実践5では、その動きや技の目標を明確にするために、幼児から出た言葉(やればできる・ちょいむず・おにレベル)を使って、3つのグループに分けた(表5)。

表 5 運動的な遊びの動きや技

	①やればできる	②ちょいむず	③おにレベル
フープ	フープジャンプ 腕回しフープ	立ちフープ・フープ縄跳び ・フープ転がし	ぱちぱちフープ・2つフープ ・座りフープ
鉄 棒	すずめ(飛び上がり、体を支える)洗濯物(両手でぶら下がる)・布団干し	前回り・なまけもの こうもり	えび・地球回り 逆上がり
のぼり棒	幼児の背の高さより上 (ジャンプで届く高さ)	棒の真ん中	棒の一番高いところ
縄跳び	ヘリコプター(二つ折りにした縄を持って体の横で回す)扇風機(頭の上で回す)	まえとび・うしろとび はしりとび・	ばってんとび・にらめっこ とび・二人とび・交代とび
うんてい	棒にぶら下がる	半分まで進む・休憩しながら進む	最後まで足をつけずに渡る

フープへのかかわり方の変化を、好きな遊び時間の実態把握と幼児の聞き取りを基に図5にまとめた。検証前のフープにかかわらない、または①(やればできる)の幼児28%が、検証後は0%になり、②(ちょいむず)や③(おにレベル)の動きに挑戦していた。さらに、動きや技に難易度を示すことで高い目標を持ち挑戦している幼児もいた。

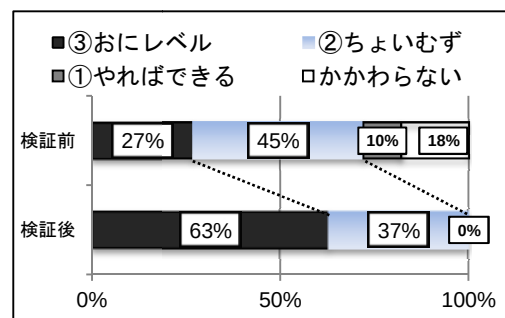


図5 フープへのかかわりの変化

一方でうんていにどれくらいぶら下がるか挑戦する幼児や、縄を何度も回してびゅんびゅんと風を起こして遊んでいる様子も見られた。さらに「うんていの横渡りだよ」と動きを工夫し挑戦する姿も見られた。

(2) 考察

結果から、運動的な遊びを楽しむ幼児が増えたことは、幼児が見せ合った動きや技を見ながら遊ぶことができるように表示したり(図6)、易しいステップから試せるように環境を工夫したりしたことが効果的だったと考える。また、より難しいことへ挑戦しようとする姿や、何度も同じことを繰り返す姿から、同じ環境であっても「これがしたい」という具体的な目標はその幼児によって異なっていることを示している。



図6 動きや技の表示

困難すぎる課題では達成感を味わう前に挫折感だけが残ってしまうし、安易な目標は達成しても充実感にはつながらない。幼児一人一人それぞれにあった目標を持たせることは、達成感を味わわせるのに有効な手立ての一つであったと考えられる。また「うんていの横渡り」のような表5には示されていない新しい動きに挑戦する姿が見られたことは、遊びこむことで多様な動きが身につく、その結果新しい動きが生み出されたことが分かる。自分なりに遊びを工夫することの満足感が、次への挑戦へとつながっていったと思われる。

以上のように、幼児が自ら選んだ遊びに主体的に取り組めるような環境を構成することで、達成感を味わい意欲的に遊ぶことができたと考える。

3 保育実践前後の結果と考察(抽出児A児の姿から)

(1) 結果

A児は、家庭への調査により、降園後、戸外で遊ぶことはほとんどなく、人形遊びやテレビを見て過ごすことがわかった。園生活でも運動的な遊びには消極的だったA児の検証前後の変容を下記に示す(表6)

表6 A児の変容

	検証保育前	検証保育時	検証保育後
幼児同士のつながり	友達と砂遊びやレストランごっこなどをして遊ぶ。運動的な遊び(鬼ごっこやかくれんぼ)は、教師が傍につくと、参加できる。	のぼり棒で、友達が作ってくれた台に上がり、手を伸ばして目印をさわる。①「お友達が椅子みたいになってくれたからペタンって触れたよ」と話す。	他児に「裸足の方が良いよ」「足の指で棒を捕まえて」とアドバイスしたり、②自分がしてもらったように、他児の体を持ち上げたりする姿が見られた。
環境(鉄棒)とのかかわりにおいて	友達が鉄棒で遊んでいるのを見ている。教師が「やってみる？」と誘っても「見るだけ、やらない。」と答える。	宝島探検の途中、自分のペースで、③すすめに挑戦してきたことを教師と一緒に喜び、友達が待っている場所へ走って向かう。	④鉄棒の前回りやなまけものなどできることが増え、「なまけものでお散歩だよ」と、鉄棒に両手両足ぶら下がりながら、左右に移動して遊んでいる。

(2) 考察

表 6 の下線①のように友達の応援や支えを受けながら遊ぶことの積み重ねにより、下線②のような友達を支える姿が見られたことは、友達とのつながりが A 児の挑戦しようとする意欲を支え、さらに友達を支えようと前向きな気持ちが働いたと考えられる。また、検証前後における鉄棒へのかかわり方を比較すると、検証前、A 児が友達のやることをじっと見ている姿から、鉄棒に徐々に興味を示していることがわかる。その後「できるかもしれない」「やってみよう」という意欲が芽生え、下線③のように主体的に鉄棒にかかわって遊ぶようになっていった。さらに、下線④のように鉄棒で繰り返して遊び、A 児なりの達成感を味わう経験を重ねたことは、体を動かして遊ぶことの楽しさを味わっていったと考えられる。遊び込むことで、できる動きが増え、徐々に身体的な能力が高まり、次への活動に新たな意欲が芽生え、取り組んでいる様子がかがえる。A 児が安定して主体的に活動するために、教師が A 児の気持ちや育ちを丁寧に読み取り、A 児に寄り添い友達や環境とかかわりを持たせる援助をし続けたことも、必要な援助であった。

以上のことから、友達と体を動かして遊ぶ楽しさを味わうための援助や、幼児理解に基づいた環境構成を工夫することによって、意欲的に体を動かして遊ぶようになったと考える。

VIII 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 遊びの中で、宝島探検などのイメージを持たせたり、幼児同士の技を見せ合ったり、声をかけ合ったりできるような幼児同士をつなぐための援助の工夫をしたことで、友達と楽しみながら体を動かして遊ぶことができた。
- (2) 幼児が自ら選んだ遊びに取り組めるような環境構成を工夫したことで、達成感を味わいながら、意欲的に遊ぶことができた。

2 課題

- (1) 戸外遊びをより充実させるために、幼児理解をさらに深め個に応じた援助や、ルールのある集団的な遊びへと発展させるための援助の工夫。
- (2) 体を動かして遊ぶことの重要性を伝え、遊び場や遊び方の紹介など家庭への啓蒙。

《主な参考文献》

『幼稚園教育要領解説』	文部科学省	フレーベル館	2008
『幼児期運動指針ガイドブック』	幼児期運動指針策定委員会	文部科学省	2012
『初等教育資料 2 月号』	吉田伊津美	東洋館出版社	2012
『ポイントと教育活動 幼稚園』	無籐隆監修	東洋館出版社	2008
『幼稚園教育要領の基本と解説』	杉原隆(第 2 章 1)	フレーベル館	2008
『0～5 歳児の運動遊び指導百科』	前橋明	ひかりのくに	2004
『援助のポイント 100』	柴崎正行	フレーベル館	2001